

2021年10月

聖句随想・折々の言（ことば）

「 連なりの力 」

牧師 森 言一郎

エウティコという青年が、窓に腰を掛けていたが、パウロの話が長々と続いたので、ひどく眠気を催し、眠りこけて三階から下に落ちてしまった。

（使徒言行録 20 章 9 節）

**今**年の平和聖日、8月1日は忘れられない日となりました。礼拝が始まって間もなく教会が停電に見舞われたのです。ほどなく、停電が旭東教会だけだということがわかりましたが、礼拝はしばらく停止。暑さ厳しい日でしたが、幸い、礼拝堂の大型エアコンの電源は別回路を引いていたため、その後を無事に過ごすことが出来ました。とは言え、中国電力の緊急対応の方が駆けつけてからも電気はついたり消えたりの不安定な状態に変わりありません。しばらくの間、大地震の時に

使うかも知れないと、説教卓の下に準備していた電池式メガフォンを手にして礼拝は進んで行きました。

明けて月曜日からの一週間が大変でした。電気設備屋さんの手配に始まり、集会室奥のステンドグラスの上からの吊り下げ型のエアコンの寿命が停電の原因とわかってからも、連絡・相談が続きました。とにかく早く設置工事をしてくれるお店探しが必要でした。思いがけない来客や相談も重なったのです。困ったのは次の日曜日の礼拝説教準備でした。月に一度、連続講解を続けている使徒言行録 20 章からの説教でしたが、書斎に落ち着いたのは土曜日の夕方でした。

\*

**た**だ、そんな中ではありましたが、説教の手掛かりになりそうな灯が心の中にあっただのです。それは、2 週程前に届いていた、『徳之島教会通信 第 56 号 つらなり』という会報でした。奄美諸島の中でも最も小さな教会である徳之島教会

をめぐる助け合いの日々の証しが心に焼きついていました。

35 年程前、わたしの母教会である銀座教会の方々数名と初めて森トミ子牧師を徳之島教会（正式には伝道所です）に訪ね、四畳半の部屋で礼拝を守った時の記憶は鮮明です。森トミ子先生、わたしの親戚ではありません。とても小柄で清楚なおばあちゃん牧師でした。さらに、今から 10 年程前にも、新しくなった会堂をお訪ねし説教を担当させて頂きました。わたしにとって深い思いがあるのが小さなちいさな徳之島教会なのです。おそらく現在も礼拝出席者は平均 5 名位だと思います。

今回の『つらなり』には、4 月に赴任されて間もない中島純先生の言葉や、旧知の先生方の、切実で誠実な思いが記されていきました。『つらなり』の最終頁には献金者リストがあります。日本各地の教会や個人の方々の名前からあれこれ想像しました。旭東教会の名前もあります。

\*

**説**教を本格的に準備し始める直前に電話をしたのは、奄美大島・名瀬教会の青山実牧師です。『つらなり』の第1号を発行した2000年当時、徳之島教会の牧師をされていた先生で、神学校卒業後直ぐに徳之島教会に赴任。10年以上、徳之島におられたと思います。わたしはこんなことを口にしました。「ご無沙汰してます、青山先生。『つらなり』有難うございます。明日は使徒言行録20章から説教するんですが、何の準備もできてなくて困って電話しました。」と。青山先生、「うんうん」と聴き続けて下さいました。

\*

**使**徒言行録20章には、パウロがあちこちの人たちとの「つらなり」の中に生きていることが浮かび上がって来る様子が記録されています。アジア州最大の都市エフェソでの宣教に区切りをつけたパウロは、12使徒たちが待つエルサレムの教会に戻る必要がありました。でも、パウロは真っ直ぐにエルサレムに向かいません。当時のパ

ウロが一番気になっていたアカイア州のコリントの教会に出向きたかったのです。それだけでなく、第二回の伝道旅行で教会を生み出したマケドニア州の、テサロニケやフィリピも訪ねたかった。そうせずには居れなかったのです。

パウロは、エルサレム教会の支援金集めをする必要がありました。献金の問題はいつの時代の教会にもついてまわります。エルサレム教会の支援金の見通しが立って、少しの廻り道のあと、いわばパウロの弟子とも言えるような 7 人の人たちと共にトロアスという港町で船出を待つのです。

\*

**翌**朝には船出です。それなのにパウロの話は止まりません。「夜中まで」「長々と」「夜明けまで」と聖書にあります。エウティコという青年は日中の仕事の疲れもあったのか、深く眠り込んでしまい、三階から落ちてしまいます。一同、「エウティコは死んだ」と、いったんは諦めるような事故でした。しかし、「騒ぐな、まだ生きてい

る」と叫ぶパウロの言葉から希望の福音が展開し始めます。そして、エウティコのこと何事も無かったかのように、パウロは明け方まで話を続けたというのです。

\*

➤ の場面、わたしはこう読みました。パウロが夜明け前まで語り続けたのは一方的なものではなく、むしろ、互いに何かを分かち合うような時間を過ごしていたのではないか。パウロたちには、時間を忘れ、夜を徹して分かち合いたいことがあったのではないか。それ程までの喜びが彼らにはあった。パウロが話すことを深くうなずいて聴く人も居れば、パウロも大いに慰められて、「そうか、それならば、わたしもこれからエルサレムでどんなことがあっても、まだ頑張れるかも知れない」と思ったのではないか。

\*

パウロにはいつしか多くの仲間たちが与えられていました。孤独ではないのです。手と手が繋がっている感じが感じられます。何百も、何千もと離れた所に立っている仲間たちに支えられ、生かされているパウロがいます。「つらなりの力」が証しされているのです。

\*

**最**近、わたしが強く感じるようになったことがあります。それは、失敗や挫折と思われるような過去の日々が、不思議な形で繋がりはじめている、ということです。その時々には最善を尽くし、一所懸命にやって来たことが糸のように紡がれることが実にしばしば起こるのです。それが、結果として、説教の言葉を生み出す力になっている。

8月8日、説教を語ることができたのは「つらなりの力」があったからです。見えないけれど、確かに存在する「つらなり」は、生かし合う力を生み出している。そう思わずにはおれません。それ

は、イエスの時から始まり、パウロの時代にもあり、今もあり、これからもきっと変わらない、福音の力なのです。end